

CLOSE-UP
INTERVIEW

大畑 大介さんに聞く

元ラグビー日本代表、コベルコ神戸スティーラーズアンバサダー

「聞き手」脇浜紀子さん 京都産業大学 現代社会学部教授

世界の舞台で活躍した
稀有な経験と
持ち前の情報発信力を生かして
ラグビーの魅力を広く伝える

おおはた・だいすけ

1975年生まれ、大阪府大阪市出身。9歳からラグビーを始め、東海大学付属仰星高等学校(当時)時代に高校日本代表に選出。京都産業大学に進学し、在学中から日本代表として活躍。1998年に(株)神戸製鋼所に入社してトップリーグの神戸製鋼コベルコスティーラーズ(当時)に所属。日本代表として2度のワールドカップに出場した。2011年に引退後は、メディアや講演を通してラグビーの普及に努める。

10年後のワールドカップを見据え

引退を決意

脇浜 本日は、元ラグビー日本代表で、現在、コベルコ神戸スティーラーズアンバサダーを務めておられる大畑大介さんにお話を伺います。大畑さんとは大学のイベントで一緒にして以来ですが、その同じ年、2019年には「ラグビーワールドカップ2019™ 日本大会」が開催されました。どのような思いで関わってこられたのでしょうか。

大畑 2007年のワールドカップフランス大会の直前にアキレス腱を断裂して出場を逃したこともあり、ワールドカップに対しては非常に強い思い入れがありました。ラグビーワールドカップの日本開催が決まったのは、現役を引退する2011年の前々年、2009年です。すでにプレーヤーとしてのピークを越えつつあることを自覚していたので、2019年の開催に向けて、自分に何ができるかを考え続けていました。日本での初開催に加え、強豪国以外での開催も初めてのことであったので、大会を大いに盛り上げたいと思いました。その結果、現役を続けるよりも、海外でプレーした経験や自身の情報発信力を生かして、ラグビーの魅力を伝

える役割を担った方がよいのではないかと思い引退を決意しました。それから10年間、開催に向けて活動してきました。

脇浜 10年先を見据えて引退を決断されたことに驚きました。

大畑 日本ではプロ野球やJリーグなどで活躍するプロアスリート、あるいはオリンピックに出場するオリンピックが高評価を受け、大きな注目を集めます。しかし、ラグビーはプロスポーツでもなく、オリンピック競技でもありません。そのような中、引退後にどうやって生きていくか考えた時、やはりこれまでの実績を生かしてトップアスリートの一員として活動していけるようになることが大事だと改めて考えました。ワールドカップ日本大会という旬なタイミングで自分にできることを精一杯やっという、というところから様々な活動をしています。

なりたい大畑大介像を常に思い描いて行動する

脇浜 セルフプロデュースをしっかりと考えて活動されていくのですね。そういう考え方はいつ頃、どのようにして身につけられたのでしょうか。

大畑 社交的なイメージを持たれがちですが、実際はコミュニケーション能力に長けているわけでもありません。子供の頃、周りはみんな野球少年でしたが、僕はみんなが興味を持つものに興味を抱けないタイプでした。けれどみんなと仲良くなりたいし友達も欲しい。どうすれば友達ができるんだろうと考えた時に、自分が興味を持たれる人間になるしかないと思ったんです。それから常に自分を客観視して、なりたいたい大畑大介像を常に思い描いて行動してきました。その結果が今につながっているように思います。

脇浜 とても意外なエピソードです。もしかすると、ラグビーを始めたのもそういう考えに基づいてなのでしょうか。

大畑 クラスの中で1人だけ変な消しゴムを持っていたら注目されるじゃないですか。それと同じで、周りがしていないことをして、あいつすごいんじゃないかと思わせたら、興味を持たれると考えたんです。そこで、子供の頃から足が速かったので、何かスポーツをしてみようと。周りの友達がやっていないスポーツがないかと探していた時に、父が高校時代にしていたラグビーが身近にあったため、挑戦してみようと思ったんです。

脇浜 中学・高校時代から足の速さを生かして活躍され

ていたのでしょうか。

大畑 ラグビーを始めた当初は、確かに足が速くてみんなが注目してくれたし、大畑にボールを回しておけば大丈夫だと頼りにされました。しかし、中学生の頃に成長痛が酷くなり、まったく走れなくなった時期がありました。そうすると注

目もされなくなるし、周りにどんどん置いていかれる、とても辛い時期でした。ラグビーを辞めてしまったら自分を表現するものがなくなってしまわないかという怖さもあって辞められずにいたのですが、その時に、やはり自分はラグビーを通して表現をしたい、だからこそきちんとラグビーと向き合おうと思い、ラグビーを自分の中の最優先事項にしよう決めました。スカウトされるような選手ではありませんでしたから、逆に自由に高校を選ぶことができたので、あえてラグビーの強豪校ではない高校を選んで進学したんです。強豪校に入っただけで自分が強くなったように勘違いしてしまう恐れもありましたし、完成されたチームに入っても自分の力がチームに与える影響を実感で



大畑 大介さん

きないと思ったのが理由です。まだ全国大会に出たことのない高校でしたが、2年生でレギュラーになれた時に初めて出場が叶いました。チームを前に進める力になれたことを実感できた大切な経験でした。

脇浜 狙い通りに成長できたわけですね。それほどのモチベーションをどのようにして維持されていたのでしょうか。

大畑 学校指定の真っ白な上履きの左右それぞれに、高校日本代表という自分の目標と全国制覇というチームの目標を書いたんです。強豪校でもないのに大きな目標を立てたものですから周囲からは馬鹿にされましたし、上履きに落書きしてはいけない規則だったので先生からはすぐに呼び出されて怒られました。でも、僕にとっては高校3年間での目標をしっかりと心に刻んでエネルギーを大きく膨らませるにはそれしか方法が見つからなかった。わざわざ上履きに書いて人に見られるようにしたのも、周囲からのプレッシャーを感じてモチベーションを高め続けるためだった。それを先生に説明して、もし目標がぶれているようなら、その時は買い替えるから言うてくださいと伝えたんです。すると、**「だったらやってみろ」と**理解してくれましたが、そうするともうやるしかないですよ

ね。結果的に全国大会に出場できましたし、高校日本代表にも選ばれましたが、怪我や練り上げでの代表入りということもあって試合に出場できない状況で、目標達成としては消化不良の高校時代でした。

厳しい道を選べという父の教えで

日本一練習量が多い大学に進学

脇浜 その後、京都産業大学に進学されますが、その理由が日本で一番練習量が多かったからというのは本当ですか。

大畑 その通りなのですが、実は一番行きたくない大学でもありました。大学でもラグビーで勝負していくことは決めていましたが、どの大学に行くべきかで進路に悩んでいました。そんな時、父がよく言っていた**「2つの選択肢があるなら厳しい方を選べ。その方が大きなものを得られる」という言葉**を思い出したので、自分の弱みを克服して成長するため、日本一練習量が多い京都産業大学に進みました。

脇浜 大学では当時の大西監督、



脇浜 紀子さん

先輩には現在の広瀬監督がおられましたね。大学時代には、どのような学びがありましたか。

大畑 みんなで1つの目標に向かうことの大切さ、ですね。京都産業大学は練習量が多いことで知られています。試合にも出られず、練習もきついなるとネガティブになる選手も多く出てきてしまいます。すると、それに下級生も影響されてチームの雰囲気はどんどん悪くなっていく。そこで新4年生になった選手全員で集まって話し合いをしたんです。僕は「監督に言われるままに練習するような受け身の姿勢でいいのか？勝てないのも受け身だからじゃないのか？ならば、もっと自分たちで考えて行動しようじゃないか」というような話をみんなにしました。そして最初に行ったのが、キャプテンを決めることでした。当時は監督に人事権があったのですが、日本代表に選ばれていた僕がキャプテンを務めれば看板になるということ、みんなに推薦されました。その時僕は、「自分にリーダーシップがあるとは思わないが、とにかくチームを勝たせたいと思っている。キャプテンを引き受けるが、自分を選んだみんなにも責任があるはずだ。だから、みんなそれぞれリーダーシップを持ちながら一緒に

やっつけていこう」という話をしました。その上で、「みんながキャプテンを決めさせていただきました。この形でいかせてください」と監督にお伝えしたところ、理解していただけでした。

それからすぐに僕が怪我をして半年近くプレーできない状態になってしまったのですが、それが逆に個々の責任感を高めるきっかけとなり、チームの雰囲気が大きく変わって、それぞれの選手が率先してリーダーシップを発揮するようになってくれたんです。京都産業大学ラグビー部には、雲ヶ畑という山まで往復で走り込む伝統的なタイムトライアルがあります。体力というより精神力が問われるトライアルなので、気持ちが悪くないチームだとタイムをクリアできる人数が極端に少なくなります。しかし、僕ら4年生はハートで乗り越えようという気持ちが高まっていて、部の歴史上初めて全員がクリアできました。すると下級生も影響されて頑張るようになり、その様子を見て上級生がさらに頑張る。そうしてチームが一つになった結果、良い成績を残すことができました。誰かが頑張ればいいというのではなく、みんなが同じ目標を持って自分にできることを一つ一つやっつけていけば自ずと結

果はついてくるのだという経験をしました。

世界を目指して奮闘した日々

脇浜 神戸製鋼では、ミスター・ラグビーとも呼ばれている平尾誠二さんとも監督・選手の関係で一緒に一緒にいます。平尾さんも鮮烈な記憶を大畑さんに残されているのではないのでしょうか。

大畑 初めてお会いしたのは、大学3年生の時です。7人制ラグビーの代表に選ばれてワールドカップ予選前の壮行会に参加した時でした。その後、平尾さんが日本代表監督になった時に、僕を選んでいただきました。総合力では自分より勝る選手はたくさんいたと思いますが、1つ秀でたものがあると期待してくれていたようです。しかし、大学4年生の時に怪我をしてしまい、ワールドカップが近くなって評価を下げたくないという思いもあって、積極的なプレーができない自分がありました。平尾さんから「そんなことでいいのか、自分はどうなりたいんだ」と言われて目が覚めたんですね。まだ何も手に入れていないのに、小さなことにしがみついて守りに入ってしまった。以前は自分ができることをやって、それでダメなら仕方が

ないという気持ちで取り組んでいたのに、それを忘れてしまっていた。それから、自分にできることで一発勝負してやろうという気持ちで試合に臨むようになったのですが、これをきっかけにパフォーマンスが向上し、それからずっと試合で使ってもらえるようになりました。平尾さんのあの言葉は僕にとつととても大きいものでした。

脇浜 平尾さんは選手としても監督としても素晴らしい方でしたが、大畑さんご自身もテストマッチでのトライ数通算69という世界記録を持ち、ラグビー殿堂入りを果たすという大きな実績を残されています。それをご自身でどのように評価されていますか。

大畑 正直なところ、トライ数の世界記録は狙っていません。ラグビー選手はチームプレーが重視されるため、個人で評価される実績は作りにくい。だからこそわかりやすい実績が欲しかったんです。となると、ポジシヨンのトライ数で世界記録を狙うしかない。世界一は簡単にとれるものではないですし、周囲の注目度も上がります。当時はスポーツ新聞の一面をラグビーがとることも稀だったので、ラグビーへの注目度を上げるためにも取りたかったんです。

ラグビーを盛り上げるべく 情報発信に力を注ぐ

脇浜 平尾さんも大畑さんも情報発信力に秀でた方だと思います。大畑さんご自身も、自分は「情報を発信する人間」という自覚があると語っていらっしやいますが、そうした思いはどこからきているのでしょうか。

大畑 子供の頃、テレビで情報発信しているアスリートを見て、うらやましさを感じていました。小学生の頃の僕のヒーローは松尾雄治さんだったのですが、学校でみんなが昨日のプロ野球の試合の話で盛り上がっている中、昨日の雄治さんのプレー見た？と話しても誰もわからない。それが悔しかった。だから、僕は自分がラグビーのトッププレイヤーになった時には、昨日の大畑のプレー見た？ラグビーのね！と言われるくらいの存在にならなくては、と考えていました。

平尾さんは太陽のような存在でしたから自然と注目が集まりましたが、それに比べると僕は電球くらいの存在かもしれない。それでも自分が動くことによってはいろんなところに光を当てることができると思うんです。そこで、現役時代からラジオの生放送をさせてもらうなど、情報発

信できる機会があればどんどん挑戦しようと思っっていました。『スポーツマンNo.1決定戦』というテレビ番組にも僕はずっと出たかったです。そこでトップを取れば、否が応でもラグビー選手はすごいと認められるじゃないですか。実際に優勝させていただきましたが、そのあとの反響はやはり大きかったですね。メディアの力を感しました。

脇浜 ご自身でも、『大畑大介商店』というプロジェクトをされています。これについて教えてください。

大畑 きっかけは、2017年から出演していたグルメ番組でした。地方の生産者を訪ねて取材するという企画で北海道のジャガイモ農家の方と連絡を取っていたのですが、ちょうどコロナ禍が始まった頃、飲食店が閉鎖されたり、給食が中止になったりして、出荷先がなくなり困っているというお話を聞きました。

現役時代の海外遠征中など、僕は食事がなかなか合わなくて苦労しました。パフォーマンスが低下してしまうことが多かったのですが、世界中どこに行ってもジャガイモはありましたから、とても助けられた経験があります。何か協力できることがないかと考えた時、取材で生産地を訪ねて採れたての野菜を食べるととても美味しいし、

栄養価も高い。僕が感動した味を多くの人に届けたいという思いもありましたので、番組を通して交流のあった生産者の方々に連絡を取って、産地直送の野菜や魚を『大畑大介商店』で販売するようになりました。

脇浜 大畑さん自身がメディアなんですね。

大畑 日本食は本当に素晴らしく、世界に誇れるものだと思います。僕はその文化を守りたい。大畑大介というメディアを通じて、生産者と消費者のボールをつなぎ、さまざまな人に日本食の豊かさを伝えていきたいと考えています。

2019年を経験した次世代が臨む 次のワールドカップへの期待

脇浜 母校の京都産業大学ラグビー部は、昨シーズン、全国ベスト4でした。本年度のチームスローガンは「Tough」だそうです。ぜひ、後輩に激励をいただけますか。

大畑 母校の試合は長く注目してきましたが、京都産業大学ラグビー部史上最高のゲームを繰り広げてくれました。あれだけのラグビーをしてくれたら、僕からは何も言うことはありません。あの強さは日々の努力の積み重ねがあったからこそものだと思います。僕たち卒業生にとつてもす

ごく勉強になりましたし、大きな刺激をもらえました。

脇浜 来年2023年はラグビーワールドカップフランス大会ですね。期待と展望をお聞かせください。

大畑 もう期待しかありませんね。僕は2回ワールドカップに出場しましたが、一度も勝っていない人間です。それに比べると今の世代の方が100倍も大きな成功体験を積んでいます。僕たちはワールドカップで大敗して世界に通じないという烙印を押された後の代表でしたので自信がない中でユニフォームを着ていました。しかし、今の若者たちは2019年ワールドカップでの成功を目にして、自分たちもあれ以上の成果を出せるはずだという前向きな気持ちになれている。今の代表にはそういう僕たちが見られなかった景色をどんどんいろんな人に見せてあげてほしいですね。大きなプレッシャーを背負うかもしれませんが、それができる立場にいるのだから、強い気持ちを持って頑張つて欲しいと思います。

脇浜 ありがとうございます。私も応援しています。

